

浪江町長 馬場 有 様

浪江町の健康関連施設整備に関する提言

平成30年2月27日

浪江町健康関連施設整備検討委員会

委員長 吉岡 正彦

浪江町の健康関連施設整備に関する提言

1. はじめに

(1) 浪江町健康関連施設整備検討委員会の設置目的

・「浪江町復興計画【第二次】」（以下「復興計画という」）には「生きがいつくりや充実した健康管理によりいきいきとした生活ができる環境を創る」という目標が掲げられている。

・町では、そのための具体的な活動や、それを支える公共施設の整備をこれからのまちづくりの根幹をなすものと考えており、その計画策定にあたっては、町を支える町民のご意見を踏まえて検討するべきものとして、本健康関連施設整備委員会を組織した。

・これらを踏まえ、本委員会では、健康関連施設の考え方や施設整備方針等の検討を重ね、本提言書としてまとめ町に提出するものである。

(2) 浪江町健康関連施設整備検討委員会の検討範囲

- ・復興計画の目標を具体的に実現するためのコンセプトや活動の内容
- ・コンセプトや活動を具体化する施設配置。ただし、「まちづくりの核となるエリア」を中心に検討
- ・施設整備のスケジュール感

2. 提言

(1) 基本的考え方

- ・平成29年3月に策定された「浪江町復興計画【第二次】」（以下「復興計画」とする）に掲げる復興の基本方針を具体的に実現することを目標とする。
- ・復興計画のうち、「Ⅲ どこに住んでいても、すべての町民の暮らしを再建する」という柱の実現を中心として考える。

（【参考】復興計画における目標の内容）

Ⅲ どこに住んでいても、すべての町民の暮らしを再建する

○実現するための目標（抜粋）

- ・多様な交流の場の創出により、どこにいても町との繋がりを保てる環境を創ります
- ・生きがいつくりや充実した健康管理によりいきいきとした生活ができる環境を創ります

○本格復興期において目指す姿（～H33/3/31 震災より10年）（抜粋）

- ・生きがいきづくり等、健康的な生活を送ることができる生活環境が整備されています。さらに、ふるさとで、多くの町民が笑顔で交流しています。
 - －医療・福祉施設が整い、健康的に暮らすことのできる生活環境となっています。
 - －一人一人が元気に暮らすために必要な健康管理の体制が整備されています。
 - －離ればなれとなった町民が町で再会し、新たなふるさとづくりが進んでいます。
 - －町外に避難されている方や、新たな土地で生活のスタートを切った方が気軽に参加できるイベントや交流会を実施し、旧知の町民と楽しい時間を過ごすことで、ふるさととのつながりを持ち続けています。
 - －社会教育やスポーツを通じた生きがいきづくりの活動が充実し、毎日を充実して暮らせる環境の整備が徐々に進んでいます。

○輝かしい未来に向けて（震災より10年後～未来へ）（抜粋）

- ・町内では、継続的な放射線の健康影響の検査・相談体制、生きがいきづくり等により健康的な生活を送ることができ、子どもたちが元気に遊べる生活環境になっています。また町に戻った方と町に戻れなかった方が、町内において笑顔で交流しています。
 - －町民同士が地域全体で支え合う地域として、子どもから高齢者まで元気な声が町中にあふれています。
 - －離ればなれとなった町民が町内で再会し、新たなふるさとづくりが進んでいます。
 - －各種イベントや交流会（例：郷土料理選手権や浪江町民運動会等）で町を訪れる機会を通して、ふるさととのつながりを持ち続けています。
- ・復興計画における考え方を踏まえ、具体的な活動を検討し、それを支える健康関連施設整備を進める上での基本的なコンセプトは以下のとおり集約できると考える。

基本コンセプト：心身健康な人たちであふれるまちづくり

町民がそれぞれに生きがいをもった生活を営むことで、心身ともに健やかな人達であふれるまちづくりを目指します。その目的を達成するため公共施設の適切な配置を進めます。

- ・基本コンセプトに留意しつつも、現時点における浪江町の居住人口が約500人（平成29年末現在）であることを踏まえ、現実的な利用者の見込みや財政状況と政策の重要性を比較し、十分に価値判断した上で、実施する具体的活動や、整備すべき施設を検討する必要がある。

- ・その際には、特に以下の点に留意すべき。

(イ) 関連施設の集中的整備

復興の拠点となる地域に集中的に配置し、利用を促進するとともに、運営コストをできるだけ抑制する。

(ロ) 関連施設の共同利用

新設が決定している施設との共用を進めることで、必要最低限な施設整備にとどめ、運営コストの抑制をはかる。

(ハ) 「町民」による具体的活動の推進

- ・町民の発意と工夫による活動やイベント運営等を実施することや、共同で運営・管理できる施設の整備等（例：幾世橋小学校のグラウンド整備）は、官民の枠組みをこえて、「浪江町民」が自主的かつ共同で行うことができるよう工夫する。
- ・また施設整備にあたっては、行政だけの視点ではなく、使っていく町民のアイデアを生かして、「浪江町民としてつくりあげていく」ことを目指す。
- ・そのため、「浪江町民」の自由なアイデアを発言しやすい環境づくりや、その声が行政等に対して風通しよく伝わる仕組みを構築する必要がある。

(2) 具体的な活動の柱

- ・基本的コンセプトで掲げる「健康」とはその考え方が多様である。委員会においては、健康には大別すれば4つの種類があるという考え方が紹介され、確認した。（4つの健康は相互に関連するもので、分離してとらえられるものではない。）

【社会的健康】人とのつながりを中心とした活動により健康になる（活動の例：交流サロンに参加、祭事を企画運営、日常会話や挨拶、地域間交流）

【身体的健康】自分自身の身体を健康管理すること（活動の例：歩く、走る、歌う、食べる、眠る、農作業をする、家事をする）

【生物的健康】レクリエーション的活動。人それぞれの娯楽を充足させること。（活動の例：自然鑑賞、空気を楽しむ、のんびりする）

【精神的健康】自己実現を迫り、何かを成し遂げることで充足感を得る（活動の例：競技大会出場、スポーツ講座、文化・工芸等の講座、歴史の探求、農作物や花き販売、読書、料理等）

（施策検討の例）

たとえば、単に体操プログラムを形成することだけでは、体操が苦手な人たちにとっての「健康」には結びつかない。また、各種交流イベントを形成するだけでは、人付き合いが苦手な人にとっての「健康」には結びつかない。

・従って、健康関連の具体的な活動や施設整備の検討にあたっては、単に運動に関する活動や施設の検討をすれば足りるものではなく、生活を豊かにすることで、心も身体も健康にするという視点が重要。よってより広い分野で具体的な活動の柱を検討することが必要。

・一方、浪江町の重要な政策課題は、「浪江町で暮らし続けたい」、「浪江町に戻って生活したい」、「今は帰れなくても浪江町とつながってほしい」という町民の思いに対応することであり、いかなる政策もこれを踏まえて企画立案する必要がある。

・上記の考え方を踏まえ、本委員会では、浪江町の重要政策課題への対応と「心身健康な人たちであふれるまちづくり」という基本コンセプトの双方を充足させる、具体的活動を提言する。

・特に、震災前の浪江町の特色を最大限生かし、人や町とのつながりを維持することで健康な生活を送ることができる活動を中心に据えて提言する。

・上記の考え方を踏まえ、基本的コンセプトを実現する具体的な活動の3つの柱を以下のとおり示す。

①個人の状況に応じた身体的健康の確保

(主な取り組み)

●介護サービスの充実と介護予防の両立

- ・介護関連施設等を整備することによる浪江町で安心して生活できる環境づくり
- ・介護関連施設と周辺施設の連携による介護予防サービスの充実

●身近な健康づくりによる体力の向上

- ・体操教室等の健康づくりプログラムを官民協力して実施

●子どもたちの運動機会の確保や子どもたちが運動でき、遊べる場の提供

●食による健康の維持・管理

- ・介護関連施設の調理場や公民館を活用し、健康維持に役立つ食の普及プログラムを実施
- ・浪江町の食をみんなで集まって調理し、食べて、おしゃべりできる集いの場を定期的に開催

②個人の時間や趣味を自由に楽しむことによる心身の健康の確保

(主な取り組み)

●図書館、公民館等を便利に活用できるように整備。自分の時間を自由に活用できる空間づくり

- ・コスモス保育園を活用して図書館、公民館を一体的に整備
- ・図書館にカフェ等の仕組みを導入して、気軽に活用できるように整備
- ・地域スポーツセンター等を活用して映画上映会等の開催

●自分のペースで好きな運動を楽しむ取り組み

- ・歩く、走るという日常的活動が気軽にできる施設整備
- ・ターゲットバードゴルフやグラウンドゴルフのように、気軽にできる競技にとりくめる施設整備

③人や町とのつながりによる心身の健康の確保

(主な取り組み)

●世代や居住地にかかわらず、浪江町内で自由にコミュニケーションをはかることのできる機会の提供

- ・介護関連施設とキッズパーク等を併設し、高齢者と子どもたちやその家族と自然にふれあえる場を形成
- ・浪江町で行われていたイベントの再開により、避難している方々とも再会できる、楽しい時間をつくる

(浪江町で開催されていたイベントの例)

- －地区体協対抗の野球、ソフトボール、バレーボール大会
 - －各地区行政区により開催されていた運動会
 - －秋のマラソンシーズンに開催されていたコスモスマラソン
 - －県内唯一のロードレース大会の県陸上協会主催10マイルロードレース
 - －浜通り地区の野球大会
- 等

・浪江町にしかない特色をつくり、町民だけでなく、町民ではない人にも関心をもってもらうことで、町内外の人の交流を促進する。そのため、継続的に開催可能なイベント等を形成する。

- －上記大会の再開
- －綱引き大会等の新規イベント

- ー地域で活動している企業等によるスポーツ競技の教室（女子ソフトボール等）
- ーバーベキュー大会やビアガーデン等、気軽に参加できるイベントの継続的開催
- ーボルダリングやアスレチック・コースの設備提供 等

●ふるさとの文化や歴史などを町民が交流しながら自主的に整備する活動

- ・現在休校になっている学校を活用し地区毎の交流の場とする。特に、浪江小学校の教室を各地区に開放し、集会スペースや地区史料の展示施設として活用
- ・町内外の人たちに震災の経験を含めた浪江町の歴史や文化を伝え、意見交換等を行う活動等を学校の教室を活用して実施。
- ・丈六公園等における植樹やコスモス等を植える活動。丈六公園を小学校の遠足の行き先として再開できるように、官民で協力して整備。

●お互いに支え合いながら事業を実施しつつ、事業の成果を評価してもらう場をつくることで、誇りをもって主体的に生きることを支援

- ・農作業をした方が生産した産品を販売することができるよう、朝市や夕市の取り組みを実施
- ・地区の自慢料理を披露する、郷土料理大会の実施等
- ・作品展の実施（十日市の際に実施していたイベントの再開）

●気軽に近隣町民との会話ができる環境づくり

- ・気軽にお茶を飲んで会話のできる場の提供
- ・近所の方とお茶を飲みながら会話をした中で出るアイデアを行政等と協力して実現できるような、風通しのよいコミュニケーション環境の実現

（3）施設整備方針

上記2.（2）の具体的なコンセプトに掲げる各種事業案を実現するため、以下の方針で施設整備を進めることを提言する。

① 地域スポーツセンターを中心とした総合的な施設整備

【提言】浪江町で目指す具体的なコンセプトを実現する拠点として、地域スポーツセンター周辺とする。ふれあいセンターなみえ運動公園を復旧・整備しつつ、介護関連施設、図書館、公民館、キッズパークを一体的に整備する。一体整備によって、運営コストを削減する工夫をする。現存するふれあいセンターは荒廃が進んでいるため解体する。

・浪江町が復興計画で目指す、「多様な交流の場の創出により、どこにいても町との繋がりを保てる環境」を整備することは、町民の帰町意欲をこれ以上減退させないため喫緊の課題と考えられる。

・各種施設整備やイベント等を通じて、浪江町に住んでいる人だけではなく、遠隔地に避難を余儀なくされている方も、浪江町に立寄り、町民同士の交流ができる環境整備を進める必要がある。また、町民以外の方も浪江町に興味をもち、訪れていただく機会をつくることのできる施設整備を進める必要がある。これにより、町内外の子どもから高齢者まで幅広い交流を進め、浪江町民のつながりを維持しつつ、町外の方との新たな出会いをつくることは、町民の心身における健康の増進につながることを期待される。

・浪江町内に住んでいる方が自分のペースで健康管理ができる場を提供し、居住人口が少ない中でも、自立的に身体的健康を維持する場を提供するのは、町として元気に復興を目指すため必要。

・これから浪江町は高齢者人口が増加することが予想される中、高齢者が高齢者の中だけでコミュニティを形成するのではなく、あらゆる世代の方とのコミュニケーションをはかることで、社会とのつながりを実感しながら生活できる環境をつくるのは必要な施策。

・子どもたちが元気に遊び、運動を楽しむことができる機会を町内に整備することは浪江町で子どもたちがストレスなく生活するために必要な施策。その際、浪江町ならではの特色ある施設整備をすることで、特定のスポーツや趣味を楽しみながら、子どもを中心として様々な世代や町内外の方々の交流を促進することもできる。

・これらを実現するため、地域スポーツセンターを中心とした地域を拠点として活用できないか。地域スポーツセンターは福島県浜通りでも屈指の収容力がある施設であり、工夫次第で様々な活用が可能となる。また、周辺には「ふれあいセンターなみえ運動公園」が存在し、一体的な運用も可能。

・浪江町における「心身ともに健康な人たちであふれるまちづくり」を具現化する拠点として整備するため、地域スポーツセンター周辺のエリアに以下の施設整備を目指すべき。

・ただし、ふれあいセンターは荒廃が進んでいることから、修繕して活用することは困難であり、むしろ解体し、解体後の敷地を活用した整備の検討を提案する。

・なお、施設整備と同時に必要な駐車場の整備は必須である。

- －ふれあいセンターなみえ運動公園（復旧）
- －介護関連施設
- －図書館（コスモス保育園を活用）
- －公民館（コスモス保育園を活用）
- －キッズパーク
- －付帯施設
- －駐車場

・以上の施設を整備し、地域スポーツセンターと相互に連携をはかることで、相乗効果を狙うことができないか。たとえば、以下のような相乗効果が考えられる

- －高齢者と子どもやその家族がふれあえる環境をつくることで、高齢者が元気になりつつ、子どもの見守りができる。例えば、浪江町の郷土料理をつくり、食べるイベントに子どもたちやその家族も参加してもらうような工夫が可能。
- －子どもをつれてくる方々同士のつながりがうまれる。
- －地域の活動を楽しく行いながらも、各種大会や作品展に参加したいと考えるようになる人が現れる。
- －気軽に運動をしている方が町内のチームに入って、社会的つながりをもてる
- －施設を個々に運用した場合、運営にかかる人員の人件費、光熱水道コスト等を個別に捻出する必要があるところ（※）、一体運用の場合コストを集約できる。
（※）個々の運営には毎年一千万～二千万円程度必要となる見込み。一体運用すれば、一つの施設の運営コストとして節約することができる。
- －ある程度広いスペースを確保することにより、継続性のあるイベント等の開催等に使用できる。また、町民が実現したいことを自由に発想することができる。

（整備すべき個々の施設）

○ふれあいセンターなみえ運動公園

【提言】浪江町で実施されていた地区別の運動会等、震災前に町民が楽しんでいたイベントを再開できるよう、人や町とのつながりを維持する場所として整備する。また、気軽に運動に取り組めるような整備の工夫をすることで、楽しく健康管理できるようにする。上記を達成するため、早急に復旧・整備に取り組む。

・ふれあいセンターなみえ運動公園を復旧・整備することで、震災前に開催され、地域のつながりをつくっていた、各種活動を再開することが可能になる。たとえば、震

災前に行われていた地区対抗のソフトボール大会やバレーボール大会、各地区行政区の運動会を開催できる。これにより、町外への避難を余儀なくされている方も浪江町とのつながりを保つことを支援することが可能になる。

・ターゲットバードゴルフやグラウンドゴルフ等、大きなスペースを使わなくても、簡易な設備を導入すれば、仲間内で気軽に楽しめるレクリエーションを実施する場として利用可能。ターゲットバードゴルフは、飛びにくいプラスチック状のボールをつかい、大きなターゲットに入れるもので、距離としては100m程度あれば十分楽しめる競技。ふれあいセンターなみえ運動公園でも競技可能。運営経費もほぼ必要ない。少人数でも楽しめる。

・「歩く・走る」といった、自分のペースで自由に楽しむことができる基本的な運動を実施することが可能。グラウンドの周縁にチップやタータン等を敷くという若干の工夫で、利用する方がより快適に運動を楽しむことができる。

・子どもたちが野球やソフトボール等を楽しむことができる施設として活用できる。

・以上のとおり、運動公園に若干の改修を加えることで、町として目標とする「具体的活動の三つの柱」に掲げるイベントや運動等を実施できる、基礎的なインフラとなることが期待される。よって早急に復旧・整備を行うことを提言する。

○介護関連施設

【提言】：ある程度の介護がないと、生活が難しいという方のニーズに答え、町民に安心感を提供するため、介護関連施設を整備する。地域スポーツセンター周辺に立地し、あらゆる世代の方とふれあえる状況をつくることで、より元気になっていただく環境整備をしてはどうか。介護施設の整備は喫緊の政策的課題であることから、町と社会福祉協議会が主体者として整備事業や運営に取り組むべき。一方で、介護に依存せず自立的に活動し、誇りをもって生きる活動を展開できる場の形成について官民連携した取り組みを強化すべき。

・浪江町の福祉政策を検討する「浪江町地域福祉計画等策定委員会」は、今後、比較的高齢の方が増加することが予想されることや、近隣市町村において浪江町に対する優先的支援を受けることが困難であることから、町独自で介護関連施設を整備する必要がある、との認識を示している。

・本委員会（浪江町健康関連施設整備検討委員会）においては、高齢者の方が自立的に活動し、誇りをもって生きる活動の支援の重要性が示された。たとえば、浪江町の

サポートセンターのサービスを受けている方の中では、自分でつくった野菜を加工して販売する等の活動が行われる可能性が議論されている。

- ・他方、介護関連施設がないために安心して生活ができないのではないかと、という相談が町民からなされることについて指摘があった。町役場に対しても、宿泊のできる介護施設が存在しないことに関する問題提起が多くなされている。これは、浪江町への帰町意欲を減退させる大きな課題であり、改善すべき喫緊の課題と考えられる。

- ・よって、自立的に活動できる方が、いきいきと生活できる活動できる場を形成しつつも、「浪江町地域福祉計画等策定委員会」における議論を踏まえ、介護が必要な方のニーズに応えるデイサービスやショートステイ等のサービスを提供する施設の整備を目指すという方針を提言する。

- ・ふれあいセンターの敷地内に整備することで、ふれあいセンターなみえ運動公園、図書館、公民館、キッズパークと一体的に運用し、高齢者が高齢者の中だけでコミュニティを形成するのではなく、あらゆる世代の方とのコミュニケーションをはかり、社会とのつながりを強く感じることでできる環境を形成し、元気に暮らしていただく工夫をしてはどうか。なお、あらゆる世代とのつながりにより、介護と子育ての一体的運用をはかることは、国内各地で昨今進められている方向性と合致するもの。

- ・また、介護保険制度の枠内におけるサービスにとどまらず、総合的な福祉センターとして整備し、地域スポーツセンターを中心とする拠点に来訪される方も使えるように工夫してはどうか。たとえば、介護保険制度を活用しなくとも利用できる宿泊棟の整備や、運動公園を利用した方が施設の温浴施設を活用するなど、多目的に使えるように工夫してはどうか。

- ・介護が必要な方へのサービス提供および必要施設の整備は、緊急性のある政策上の重要課題である。また、介護関連施設と図書館、公民館等、周辺施設との連携をはかることでできる施設整備は、行政関係者との密接かつスピード感をもった連携が不可欠。よって、施設の建設及び運営については、浪江町および社会福祉協議会が主体者として実施することを提言する。また、浪江町および社会福祉協議会は、施設整備の財源等について、国、県との連携のもと、必要な財源を確保すべきである。

- ・図書館、公民館、介護関連施設、キッズパーク等を一体的に運用することで、運営にかかわる人員の人件費や、光熱費／水道費コスト等を抑制する工夫をすべき。

- ・一方、自立的に活動し、誇りをもって生きる活動を支援するため、地域スポーツセ

ンターを中心とした拠点や、浪江町役場、「まち・なみ・まるしえ」、「交流・情報発信拠点」等の場所を活用して、野菜等を販売する朝市、夕市の取り組み、作品展の開催、郷土料理大会の実施等、各種イベントの形成を官民連携で取り組むべき。

○図書館・公民館

【提言】ふれあいセンターにあった、「浪江町中央公民館」及び「図書館」の機能をコスモス保育園に移転する。介護関連施設、キッズパークとの一体的整備を目指す

・震災前、図書館はふれあいセンターに設置され、中学生や高校生を含む多くの町民が利用していた。また、浪江町に関する史料が保存されており、町のアーカイブスの一つとして整備する必要のある公共施設。

・浪江町中央公民館は、ふれあいセンターに設置され、地域の催事、生涯学習の拠点、集会場として広く活用されていた。

・図書館は、町民の趣味や娯楽を充足させることに加え、子どもたちの学習施設として基本的な機能をもつ施設。公民館は、具体的活動の柱として掲げるどの活動やイベントを実施する場合でも活用可能な施設であり、町の基本的かつ重要な施設と考えられるいずれの施設も早期の復旧・整備が必要

・他方、双方の施設が設置されていたふれあいセンターは建物が古く、かつ荒廃が進んでいるため、解体するのが妥当な状況。

・また、ふれあいセンターの敷地内には、コスモス保育園があるが、浪江町は復興の拠点の一部として、町の東側に「にじいろこども園」を整備済みであり、現状の居住人口から考えると、コスモス保育園は当分の間保育園としての施設利用が見込めない。ただし、建物としては再利用可能であることが確認されていることから、保育園の他目的利用を積極的に検討し、施設の維持と有効な活用をはかるのが妥当な状況と考えられる。

・したがって、地域スポーツセンターを中心として、ふれあいセンターなみえ運動公園、介護施設と連携し、隣接するコスモス保育園に図書館と公民館機能を移設させてはどうか。また、現在浪江町が福島市に設置している「ライブラリーきぼう」についても、現在の利用状況を踏まえつつ、コスモス保育園に移設する図書館と統合することを、この機会に検討してはどうか。

・前述の介護関連施設、及び、後述するキッズパークと一体的に整備することにより、

子どもを連れてくる家族連れが立ち寄りやすくする工夫ができるのではないか。たとえば、カフェ等の機能を併設し、立ち寄りやすい空間にできる工夫をすべきではないか。また図書館で電子書籍・雑誌を読める環境を整備する等の工夫が必要ではないか。

・図書館、公民館、介護施設、キッズパーク等を一体的に運用することで、運営にかかわる人員の人的費や、光熱費／水道費コスト等を抑制する工夫をすべき。

○キッズパーク

【提言】運動公園、介護関連施設、図書館、公民館と一体的に整備することで、家族ぐるみで浪江町に立ち寄ることのできる仕組みを目指す

・震災前、浪江町には幼稚園、保育園が各地区に存在し、子どもの声が絶えない環境であった。しかしながら、現時点で浪江町に帰町している人口構成を見れば、60才以上が約45%を占め、子どもが日常的にいる環境ではない。

・他方、家族で即座に浪江町に居住することのできる町民は少ない状況。平成28年度の住民意向調査によれば、浪江町への帰町の意欲を示す方のうち、子どもをもつ家庭の主力となる、20代で約11%、30代で約6%にとどまる。

・そこで、子どもをもつ家庭の方が浪江町に便利に住んでいただくことができるよう、町内に認定子ども園である「にじいろ子ども園」を整備し、一時預かり等のサービスを展開しているところ。この取り組みに加え、浪江町に住んでいる子どもたちが元気に遊ぶことで、ストレスを感じることなく、生活を楽んでもらうと同時に、浪江町に住むことができなくても、家族で気軽に浪江町を訪れ、子どもたち同士で遊ぶことができる機会や場をつくることで、人や町とのつながりを維持し、ひいては、将来的に浪江町で生活することを検討しうる素地をつくれぬか。

・ふれあいセンターなみえ運動公園、地域スポーツセンター、図書館、公民館、介護施設と一体的に運用できるよう整備を進めることで、子どもを含め、家族や親族で浪江町に立寄り、様々な世代や居住地の方と交流できる環境整備をすることにより心身ともに健康になる取り組みを進めるべきではないか。

・図書館、公民館、介護施設、キッズパーク等を一体的に運用することで、運営にかかわる人員の人的費や、光熱費／水道費コスト等を抑制する工夫をすべきではないか。

○付帯設備・サービス

・町民も町民以外の方も立ち寄り、町内外の人の交流を促進するため、気軽に立ち寄れる工夫が必要。カフェやドックラン等の併設をすることで、様々な趣味や背景をもった方が家族で訪れることのできる空間を目指す。

・アスレチックやボルダリング施設等、近隣市町村に存在せず、ある特定のスポーツや趣味を楽しむことのできる施設を整備することで、浪江町ならではの特色ある交流の場を提供することを目指す。

・町内外の方々が家族で訪れることのできる環境整備を目指すためには、公共施設に加え、付帯設備の整備をはかるべき。

・図書館、公民館、キッズパークの活用を考える場合、カフェ等の併設によって、子どもたちを遊ばせながら喫茶や軽食を楽しむ工夫をすることで、より立ち寄りやすい環境を整備することができるのではないかな。

・「ペットも家族である」と考える方が増加している中、犬や猫等のペットを連れて外出できるドックラン等の環境を整備することで、より立ち寄りやすい環境を整備することができるのではないかな。また、子どもたち同士でペットと遊ぶ環境を整備することで、子どもたちが生活を楽しむことができるのではないかな。さらに、愛犬家、愛猫家同士で共通の話題をもつことで、町内外の交流が促進されるのではないかな。

・アスレチックやボルダリング等、今後、子どもを中心とした競技人口の増加が見込まれる施設を整備することで、子どもたちの運動機会を充実させると同時に、近隣の子どもたちを中心とする様々な世代の人たちが浪江町に訪れて、運動等を楽しみながら交流をはかることができるのではないかな。近隣市町村における立地が多くない施設であり、浪江町ならではの施設として、人の交流を促進することが期待される。

・上記施設の運営にあたっては、町民自身による施設整備や運営できる体制をつくることで、常に町民自身のアイデアにより発展・改善がはかれるようにすべき。

②丈六公園の再生

【提言】あらゆる世代の町民の憩いの場として早急に復旧・整備する。桜の植樹やコスモス等を植えるイベントを官民連携で形成する。

・震災前からあらゆる世代の方々の憩いの場として活用されてきた公園である。特に、遊具の充実、百本以上の桜が植樹されていること、山等の自然を活用していることから、小学校の遠足の行き先や、家族での花見の場所、簡単なウォーキングの場所とし

て、あらゆる目的のために活用されてきた。

- ・また豊かな自然、展望台、充実した遊具等が整備され、子どもたちの遊び場として確立されていた場所。

- ・丈六公園は、人とのつながりを形成できる場であると同時に、町民それぞれが自分の仕方で楽しむことができる場所。本委員会で議論してきた具体的な活動内容を複数同時に達成できると考えられる。また子どもたちがストレスなく浪江町での生活を楽しんでもらうため、子どもたちの遊び場として丈六公園は必要不可欠な施設。以上の理由から早急に復旧させるべきである。その際、損壊している展望台や遊具の復旧・整備、病気になっている桜の植え替え等により、人が集まる公園として再生をはかるべき。またコスモスやツツジなどを植えることにより、浪江町の特色を生かした復旧・整備を実施すべき。

- ・公園の再生とともに、子どもたちのウォーキングプロジェクト、桜の植樹祭、コスモス等を植えるエリアの造成等、あらゆる世代が楽しむことのできるプロジェクトを官民が協力して立ち上げるべき。

③浪江小学校、中央公園の活用

【提言】町民が一時的に利用することや、各地区が保存している文化財等の保管・展示スペースとして活用することで、町民の集いの場として復旧することを目指す。また、企業、大学、NPO 等が利用できるスペースとすることも視野に入れる。

- ・浪江小学校と中央公園は町の中心部に位置し、町民がアクセスしやすい場所にある。また浪江小学校は部屋数が多く、様々な目的のために活用することが可能。残念ながら、現状の浪江町の人口からみるに、浪江小学校を学校として再開できる時期を特定できないことから、当面、町民や町を訪れる方が活用できるスペースとして利用することを目的に復旧すべきである。

- ・町民の集会の場所や、各地区が独自に保存している文化財等の保管・展示スペースとして、行政区等に各教室を開放することを検討すべき。また、企業、大学、NPO 等、町外から来る者が利用するスペースとしても活用できるよう制度設計をすべき。

- ・各地区がもつ伝統的な知識や郷土芸能の次世代への伝承のために使うことを検討すべき。

- ・町内外の人たちに震災の経験を含めた浪江町の歴史や文化を伝え、意見交換等を行

う活動等の拠点として浪江小学校を活用することを検討すべき。たとえば、語り部の活動拠点や、震災当時の経験を伝える記録や紙芝居等の展示場所として活用することが可能と考えられる。活動されている方々と連携し、効果的な活用方法を検討すべき。

- ・また、特別教室等を活用して、浪江町の食をつくり、食べて、おしゃべりするイベント等を工夫しながら開催することも可能。地区毎に集会を開催するときに同時開催することもありえる。これらの活用を検討すべき。

- ・さらに、浪江町の伝統的な祭りである十日市では、浪江小学校等を活用し、バザーや作品展を実施していた。これらと類似の行事を目指すことを検討すべき。

- ・浪江小学校の活用方法に応じて、中央公園と浪江小学校の校庭の活用方法を併せて検討すべき。浪江小学校周辺には駐車スペースがないため、施設として有効に活用できなくなる可能性がある。たとえば、浪江小学校の校庭を駐車場とし、中央公園をイベント催事場等として整理することを検討すべき。

- ・浪江小学校のプールの再開や、釣り堀等の他目的に使用することの是非は運営コスト等との見合いを改めて検討する。

- ・浪江小学校の復旧には多大な費用が見込まれることから（※）、国、県との財源協議を実施しつつ、実際に活用する必要なスペースの整備にとどめるべきである。

（※）すべての復旧を実施した場合の費用は十億円程度と試算されている。

④なみえ創成小・中学校の活用

【提言】なみえ創成小・中学校のグラウンドは一般共用ができるよう制度設計する

- ・平成30年4月の開校が予定されている、なみえ創成小・中学校は、子どもが元気に安心して遊べる空間を提供するという趣旨で、校庭のほぼすべてに人工芝を敷設することとなっている。

- ・学校は生徒が中心となって活用するものであるものの、生徒が利用していない時間帯等については、有効に活用し、町民等の運動機会の提供を行うことが制度的に妨げられているわけではない。

- ・サッカーやフットサルなどのスポーツを通じて、仲間が集まってレクリエーションを楽しむことや機会を提供することで、人のつながりの維持や、身体的健康を維持することを目指すことは重要。さらに、子どもたちに町民が競技を教える素地になるこ

とも期待できる。よって、創成小・中学校のグラウンドの一般共用ができるよう制度設計をすべき。

⑤歩くことをサポートする簡易な修繕

【提言】震災前は、「コスモスマラソン」に多くの町民が参加し、町のイベントとなっていた。また「10マイルロードレース」は県内の実力あるランナーも参加し、競い合った伝統ある大会であった。正月には初日の出をみるために海岸まで歩くというイベントもあり、今年再開した。

・これらのイベントによる人と町とのつながりを維持すると同時に、「歩く」「走る」という基本的な運動に参加しやすい環境づくりをしてはどうか。イベントの形成とともに、道路に距離表示や消費カロリー表示等を行うことで、毎日いつでも歩きやすい環境をつくってはどうか。

⑥町営幾世橋グラウンド

【提言】グラウンドの復旧・整備が特段必要なく、簡易な草むしり等のみで運営が可能であることから、利用者の自主的な管理が可能であることを前提に、グラウンドゴルフやソフトボール等、自由に活用できるよう開放してはどうか。

⑦パークゴルフ場

【提言】パークゴルフ場は、居住人口や財政運営の見通し等を見きわめながら、整備の是非について検討を続けていく。当分はターゲットバードゴルフ等、町民が気軽に楽しめる競技ができるよう施設整備を進める。

・震災前は浪江町に36ホールを抱えるパークゴルフ場があり、パークゴルフ協会が運営していた。町内外の多くの方がパークゴルフを愛好し、年間の来場者は3万人を超えた。町民でパークゴルフを楽しみたい方は少なくない。

・他方、パークゴルフ場を運営するには、指導員やアドバイザーが必要だがその数は年々減少しており、確保が困難との意見がある。さらに、近隣市町村に複数のパークゴルフ場があり、既に多くの方がこれを活用していることから、震災前と同規模のパークゴルフ場を建設しても、震災前と同じように集客し、運営することは困難であると考えられる。

・現在の浪江町の居住人口、近隣市町村のパークゴルフ場の影響、財政運営の状況等を鑑みると、多大な運営予算（※）を要するパークゴルフ建設を決断するのは時期尚早ではないか。

（※）他市町村の事例をみると、規模によるが、年間二千万円～三千万円の支出が見込まれる。

・財源や利用人口等について見極めながら、パークゴルフ場の建設について検討を続けていくべきではないか。たとえば、国の定める「復興創生期間」が終わった後の復興推進体制がある程度定まった段階で、整備の是非について判断してはどうか。

・そのため、国、県に対しては、パークゴルフを含む公共施設の整備が可能な予算を「復興創生期間」後も引き続き確保するよう要望を継続すべき。

・他方、パークゴルフではないが、同種の種目としてターゲットバードゴルフという種目がある。飛びにくいプラスチック状のボールをつかい、大きなターゲットに入れるもので、距離としては100m程度あれば十分楽しめる競技。復旧・整備が期待されるふれあいセンターなみえ運動公園でも競技可能。運営経費もほぼ必要なく、少人数で楽しめる。

・具体的コンセプトとして掲げる、「個人の状況に応じた身体的健康の確保」や、「個性や趣味を自由に楽しむことで心身の健康」を目指すのであれば、まずはターゲットバードゴルフ等、手軽に誰でも楽しく遊べる環境を早急に整備すべき。

⑧プール関連施設

【提言】プール関連施設は、居住人口や財政運営の見通し等を見極めながら、整備の是非について検討を続けていく。

・震災前、浪江町に市民プールはなかったが、各学校にプールが存在した。新設されるなみえ創成小・中学校にプールが建設されず、町内にプールが存在しない状況。

・高齢者の運動や子どもたちの授業のためにプールを整備するニーズはある。

・他方、浪江町の居住人口、なみえ創成小・中学校に通う子どもたちの数、近隣に温水プールを整備している自治体が存在すること等を鑑みると、プール利用のため浪江町に訪れる人数を見込むのは難しい。さらに自立的な財政運営の目途がたっていない状況で、多大な運営予算(※)を要するプール建設を決めるのは時期尚早ではないか。

(※) 他市町村の事例をみると、規模によるが、年間三千万円～四千万円の支出が見込まれる。

・財源や利用人口等について見極めながら、プール関連施設の建設について検討を続けていくべきではないか。たとえば、国の定める「復興創生期間」が終わった後の復興推進体制がある程度定まった段階で、整備の是非について判断してはどうか。そのため、国、県に対しては、プールを含む公共施設の整備が可能な予算を「復興創生期間」後も引き続き確保するよう要望を継続すべき。

◎拠点間の移動がしやすくなるサービスの提供

【提言】

- ・地域スポーツセンター周辺拠点、浪江小学校、浪江町役場、「交流情報発信拠点」等を結ぶ交通サービスや、JR浪江駅の東西を渡る歩道橋等の整備につき検討すべき。
- ・地域スポーツセンター周辺と「まちづくりの核となるエリア」を結ぶルートを、飲食や各種サービス提供ができる、歩いて楽しいエリアとして整備すべき

・復興計画では、「まちづくりの核となるエリア」を国道6号と浪江町役場を中心とする地域と位置づけている。本計画で「心身ともに健康なまちづくり」の一つの拠点と位置づけている、地域スポーツセンター周辺や浪江小学校と、「まちづくりの核となるエリア」は、約1km～1.5km離れており、徒歩で移動するのが難しい。また、新設が予定されている「交流情報発信拠点（いわゆる道の駅）」と地域スポーツセンター周辺も同様に約1.5km離れている。

・これらの施設が連携して、イベント等を開催することで町内外の人たちが浪江町に来てもらう環境を整備することが重要であることから、これらを結ぶ交通サービスの充実は不可避な課題。現在展開しているダイヤモンドタクシーの活用を含めた検討を進めるべきである。

・また、地域スポーツセンター周辺と「まちづくりの核となるエリア」を結ぶルートを便利に行き来することができるよう道路等の整備が必要。JR浪江駅の東西を行き来できる歩道橋等の整備により、拠点間の便利な行き来を実現できるよう検討を進めるべき。また、地域スポーツセンターやJR浪江駅周辺と「まちづくりの核となるエリア」を結ぶ駅前通り等の整備を進め、歩くことが楽しく感じられる工夫が必要。たとえば、駅前通りにおける飲食・サービス業の進出を促し、食べ歩き等をしながら、拠点間を移動することができるよう、中心市街地のまちづくり政策を検討してはどうか。

（４）町民の自由なアイデアを具体化するために必要な課題

①町民と行政等をつなぐ仕組み

浪江町に住む町民がいきいきと生活し、心身ともに健康となるための具体的なアイデアは、町民自身の自由な発想のもとに進化させていくべきもの。

たとえば、地域の集会等が出る意見にとどまらず、隣近所の普段の会話の中から出てくるアイデアが生まれ、それが行政等関係者にスムーズにつながることで、具体的

活動が発展的に展開されることが理想。

よって、これを実現するため、行政等関係者と町民をつなぐ機能（地域コーディネーター等）により、「町民」同士で具合的活動を展開する工夫をしてはどうか。

②広報活動の強化

具体的な活動展開が、町内外のあらゆる人に伝わる工夫が必要。伝わることで活動参加を後押しするとともに、さらに新たなアイデアが生まれることが期待される。

また活動記録を発信し様々な方に見ていただくことで、喜びが生まれ、心の健康につながるという効果も期待される

よって、行政による広報活動強化に加え、町民自身が情報を発信し、広く町内外に浪江町を知っていただく活動を強化してはどうか。広報強化の具体的方策には、ICTの活用に加え、紙媒体の活用、ビラ配り、口コミ等、様々な要素を組み合わせる必要がある、単に発信ツールを整備するだけにとどまらない。その総合的な戦略について専門家を交えて検討を進めてはどうか。

(5) スケジュールと財源に関する課題

①早急な復旧・整備が必要な施設

上記(3)にて早急に復旧・整備が必要と提言されている施設（地域スポーツセンター周辺拠点（ふれあいセンターなみえ運動公園、介護関連施設、図書館、公民館、キッズパーク、付帯施設）、丈六公園、浪江小学校、中央公園等）については、平成30年度に、調査・設計に関する業務を開始し、早々に復旧・整備が実施できるよう、国、県と財源協議を開始すべきである。調査・設計を速やかに進め、国が定める「復興創生期間」の期間内（平成32年度まで）にすべての整備が完了すべき。

調査・設計の段階で、必要な利用料徴収の制度設計について同時に検討を進めるべきである。町民の使いやすさを追求するだけでなく、利用者負担の原則を念頭におき、バランスのとれた制度設計を目指すべき。

②財源や利用人口を見きわめながら検討を続けていくべき施設

パークゴルフ場、プール関連施設については、国の定める「復興創生期間」終了後、国、県、町の復興推進体制がある程度定まった段階で、利用人口の予測や必要財源等を踏まえた上で整備の是非を判断してはどうか。そのため、国、県に対しては、パークゴルフ場、プール関連施設等、公共施設の整備が可能な予算を「復興創生期間」後も引き続き確保するよう要望を継続すべき。

③具体的活動の実施に関するスケジュール感

・介護関連サービス

現在、浪江町内に二か所のサポートセンターを立ち上げており、通所介護・訪問介護関連事業、地域サロン、総合相談等のサービスを展開している。これらのサービスは継続しつつ、新設する介護関連施設と相互に連携し、住民の多様なニーズに即応できる体制を構築すべき。

介護関連施設の利用が可能としている近隣市町村と連携し、浪江町に住みつつ施設の利用ができるよう、ケアマネージャー等を通じた連絡体制を引き続き整備すべき。

・各種イベント等

各種イベント等は施設の完成を待って実施するものではなく、既存の施設等を活用しながら、創意工夫して即座に実現すべきもの。よって、町民のアイデアを収集しつつ、「町民」の立場で可能なことから随時実行すべき。

・地域コーディネーター

町民のアイデアが新たなイベント等の創意工夫を生むことから、アイデアを収集することが期待されるコーディネーター事業は速やかに実施されることが望ましい。

・広報活動強化

実施されるイベントが速やかに広報され、町内外の方々に伝わる体制は町民のアイデア収集と表裏一体であり、専門家等との戦略研究等は早急に着手すべき。

(6)フォローアップの枠組み

・本提言の記載内容の具体的に実現できるよう「浪江町民」としてフォローアップや意見交換ができる枠組みをもつことが必要。本委員会のメンバーを中心に、まちづくりに協力していただける町民と、定期的に本報告書のフォローアップができる場をつくり、「浪江町民」が協働して事業の実現することを目指す。委員会等の会議開催にこだわらず、あらゆる機会を活用して意見交換することに主眼を置く。

(以上)

■ 浪江町健康関連施設整備検討委員会 構成員名簿

委員長 吉岡 正彦（公益財団法人ふくしま自治研修センター総括支援アドバイザー兼 教授）

副委員長 佐藤 秀三（浪江町行政区長会 会長）

（敬称略）

役職等	氏名
公益財団法人ふくしま自治研修センター 総括支援アドバイザー兼 教授	吉岡 正彦
株式会社 Waisports ジャパン代表取締役 兼 筑波大学体育系研究員	松田 裕雄

（敬称略・五十音順）

役職等	氏名
浪江町仮設商業共同店舗施設管理協議会 会長	阿久津 雅信
あぶくま信用金庫 浪江支店長	阿部 高浩
町民関係者	石井 絹江
町民関係者	岡 洋子
浪江町地域福祉計画等策定委員会 委員長	川村 博
一般社団法人浪江青年会議所 2018 年理事長	佐々木 公一
浪江町行政区長会 会長	佐藤 秀三
一般社団法人浪江青年会議所 2018 年副理事長	前司 昭博
体育協会関係者	長岡 惣一
浪江町教育委員	半谷 正彦
アーカイブ専門家（元浪江町役場アーカイブ担当者）	森田 貴之

■ 「浪江町の健康関連施設整備に関する提言」策定経過

日付	回	次第
平成29年12月22日	第1回委員会	1. 開 会 2. 委嘱状交付 3. 副町長挨拶 4. 委員長・副委員長の選出 5. 議 事 (1) 浪江町健康関連施設整備検討委員会について ①委員会目的、施設配置コンセプトの説明（事務局） ②意見交換 (2) 健康関連施設の整備に関する考え方について ①事務局素案の説明（事務局） ②意見交換 6. その他 7. 閉 会
平成29年1月31日	第2回委員会	1. 開 会 2. 副町長挨拶 3. 委員長挨拶 4. 議 事 (1) 浪江町の健康関連施設整備に関する提言（案）について (2) その他 5. 閉会